研究会報告

丸山　徳次

里山ORC研究会は、最終年度である2008年度、次の通り3回の研究会と1回の特別研究会議、それから研究班2を中心とした1回の研究合宿を実施した。

第20回研究会　2008年4月19日（木）14：45～17：15
於：龍大瀬田学舎7号館　環境演習室2
近藤倫生（龍谷大学理工学部准教授）「生物多様性とは何か－安定性と予測不可能性」

研究推進会議　2008年6月5日（木）17：00～19：30
於：（深草学舎）紫英館2階　第1共同研究室
（瀬田学舎）智光館にて深草とテレビ中継

第21回研究会　2008年8月1日（金）14：00～17：50
於：龍大深草学舎紫英館2階　第1共同研究室
（1）宮浦富保「瀬田丘陵の全体を見る」
（2）林珠乃「GISの説明と活用の可能性」
（3）牛尾洋也「南大萱資料室・聞き取り調査と課題の検討」

研究合宿（研究班2）2008年8月29日（金）～30日（土）
於：ピアザ淡海（滋賀県立県民交流センター201/202会議室；ホテル・ピアザびわ湖）

第22回研究会　2009年3月22日（日）

なお上記以外、2008年7月29日（火）、研究班2の牛尾洋也、鈴木龍也、三阪佳弘の法学グループに丸山が加わって大津市瀬田の南大萱資料室を訪ね、室長の松田庄司氏を中心とした聞き取り調査を行った。同様の調査研究はさらに牛尾洋也によって数度行われた。

以下、研究推進会議を除いて、それぞれについて簡単に報告する。

第20回研究会について

龍谷大学理工学部准教授である近藤倫生氏を招いての研究会。「生物多様性とは何か－安定性と予測不可能性」と題して、理論生態学から生物多様性についてのレクチャーを受けた。

進化生物学・生物系統学の根本的な見方は「すべてはつながっている」ということである。生物多様性は①種内、②種間、③生態系の3つの多様性として考えられる。また、細胞－生物個体－個体群（population）－生物群集（community）という「生物の階層性」を見ることが重要になる。「自然生態系の複雑性は予測や制御を困難にするが、果たして単純化することで予測可能性・制御可能性が高まり、全体として安定性が高まるのか？」ということが問題である。

ドイツの菜の花畑と中国雲南省のいもち病の例が取り上げられた。ドイツの菜の花畑では、菜の花畑だけで構成されている場所よりも、自然地域が複合している場所の方が害虫による被害が少ない。これは、害虫の天敵が自然地域から供給されることによる、と考えられる。また中国雲南省では、餅米とうるち米のそれぞれ単作農地よりも、交互に両者を植える混作農地の方がいもち病の被害が少ないことが判明した。単作に比べて多様な病原菌が発生することで、いもち病そのものの被害が抑制されたものと考えられる。

結論的に言えば、予測可能性は安定性と表裏の関係になる。つまり、予測可能性が高まれば安定性が低下し、予測不可能性が低くなれば安定性が増大する。これは要するに、複雑性が維持され生物多様性が高まることと、単純化し均質化することとが対立関係にある、ということである。①生物ユニット（生物群／群集）のなかにサブユニットの多

様性（異質性）がある、②特定の環境のもとでは、そこで有利な特徴をもつサブユニットが優占する、③環境の変化に応じて、ユニット全体の特徴が柔軟に変化する、④やっていけるサブユニットがいる限り、ユニット全体がつぶれることはない、⑤だが、この全体の安定性はサブユニットの動的変化と特徴の変化を伴う。 － 制御可能な単純な系は柔軟性を欠くので長続きしない。

「すべてはつながっている」という見方は、具体的にはfood web という構造で示された。質疑応答の場面で、近藤氏は、＜自分＞と何でもない虫や動物とがつながっている、という見方でもあると言う。そして＜自分＞自身が、物としては絶えず変化し、消滅していると考えると、自分を支えているものは何か、自分は何か、と改めて考える。すると、自分という存在は、あたかも燃える炎の先のようなものであって、猛烈な変化作用の頂点に存在する、実体のないようなものであり、その炎の全体が他のあらゆる生命とつながりになっている、といった趣旨のことを述べた。私には、ほとんどライプニッツのモナドロジーの世界観に聞こえたし、西田幾多郎の「場所の論理」のようにも感じられた。

南大萱資料室での聞き取り調査について

大津市瀬田の南大萱資料室にて、松田庄司氏（南大萱資料室長）への聞き取り調査を行った。國松厳太郎氏（副室長）からもいくつかのコメントをいただいた。

まず、牛尾研究スタッフが事前に用意した「質問メモ」に即して質問内容を説明し、そのあと松田氏から種々話を聞き、話し合いが展開した。牛尾氏の質問の中心は、南大萱の山の所有権、特に熊ヶ谷に焦点をあてた瀬田山全体の所有権の変遷に関するものだった。その際、昨年暮れのシンポジウム「瀬田山会議」における田中三郎氏の講演が重要な手がかりとなっている。田中氏は「古文書の中の村山」と題して講演されたが、「村山」の概念が多義的であって、理解がむずかしい。松田氏は、子どもの頃の記憶を基に、おおよそ次のように述べられた。

「村山」という言葉はかなりいい加減に使われていたと思う。松田家の場合、所有権者は本家であったが、その山を分家の者はほぼ自由に利用することができた。薪利用等、エネルギー源としては山を利用することによってのみ生活が成り立っていた以上、誰もが何らかの形で山を利用せざるを得なかった。松田家の利用地は、大江から入った場所

であり、現在の龍谷大学の手前あたりだった。ただ、他に村総代の山が「村山」として共同利用された。家普請のとき、松の木を伐採してそれを運び出すのは大変な労力がいったものだが、それは「結い」による労働の互恵的な提供が前提になっていた。

明治初年、膳所藩の武士たちがいわば一種の退職金として土地をもらい、その多くがすぐに買い取られることで、やがて、地租改正後の最初の土地所有権の確認書である明治11年の「南大萱地籍簿」にあるような状況となった。寺社やため池は課税対象外であるから、この地籍簿には記載されていない。

田中三郎氏の講演では、「琵琶湖の藻が刈草を上回る肥料効果をもっていた」ということが言われ、大萱における山利用として、刈敷的な意図がなかったことが指摘されているとの発言にうながされて、松田氏は、子ども時代に藻を採る仕事が大変だったとの記憶を語られた。長い柄のついた熊手のようなもので湖底をさらうのだそうだ（藻の採取は夏、田へのすき込みは冬）。瀬田山の利用は、直接的には、建材としての松および柴刈り、さらには松茸、雑茸の採取が中心であり、全体としては、水源としての意味が大きかった。肥料はあくまでも湖岸の藻に依存していたのである。（三阪氏によれば、山の草刈りについての申請が膳所藩に出される場合、琵琶湖の藻の採取が洪水等で困難な時になされているようである。）── 明治29年に大水害があり、やがて明治37年に南郷洗堰が完成する。琵琶湖の水位が安定することで干拓事業が始まった。

江戸時代、南大萱の人口はほぼ600人余りで一定している。婚姻の規定も厳しく、よそ者との婚姻を禁じてきた。瀬田山を利用することを始めとする自然への適応によって、ほぼ定常的な生活の持続性が、自然的に維持されてきたのだと推測される。

第21回研究会について

（1）宮浦富保「瀬田丘陵の全体を見る」

本年7月12日にNPO「森の風音」が中心となって開催されたシンポジウム「びわこ文化公園をみんなが憩える里山に」において、宮浦センター長がパネリストの一人として話された内容の紹介があった。びわこ文化公園の当初計画は巨大なものだったが、その後、その計画が縮小された後、1980年代の後半、龍谷大学瀬田学舎の建設が開始された。瀬田丘陵の開発史において、びわこ文化公園と「龍谷の森」とが現時点で好対照をなしていることが、改めて注目される。文化公園の当初計画図や航空写真を、通時的に

地図と重ね合わせるプレゼンテーションは、データ処理の一つの方法としても興味深かった。

(2) 林珠乃「GISの説明と活用の可能性」

上記のプレゼンテーションの方法を承ける形で、RAの林氏がGIS (Geographic Information System) について簡単に説明するとともに、それを瀬田丘陵に応用する可能性について報告した。文理の別をも含めた様々な分野の視点からのデータを、地図上に総合することの可能性とその意義が強調されたが、里山ORCの成果を最終的にまとめる一つの方法としても利用価値があると思われた。特に「龍谷の森」の地図情報は、独自に完成させていく必要がある、と思われる。

(3) 牛尾洋也「南大萱資料室・聞き取り調査と課題の検討」

7月29日に行われた南大萱資料室での聞き取り調査の報告がなされた。江戸期の瀬田山の所有と利用、明治初年以降の所有と利用の変遷が話題の中心だった。江戸期の「御林山」は藩有地とされているが、他方で「村山」ともされ、計算上は南大萱の1/4は村山であるが、「村山」という表現の多義性故に、その帰属はなお判然としない。明治初年、官林払下にともない相当の濫伐があったように推測され、それに対して水源涵養等の維持保存を理由として明治8年の「官山払下嘆願」がなされた。下って昭和30年代になると、揚水ポンプによる農業用水の確保の結果、水源地としての意味を失い、昭和34、35年に西部鉄道による買い占めが一気に起こった。── これまでの土地台帳調査や各種文献調査が総合されつつあることを感じさせる、極めて意欲的な報告だった。

研究合宿について

研究班2が主催する研究合宿であり、丸山徳次、吉村文成、鈴木龍也、牛尾洋也、三阪佳弘、田中 滋、高桑 進が参加し、RAの蔭山歩、林 珠乃も参加した。

〔29日13：00～19：30〕

(1) 吉村文成「『畠田』の発見」

2006年度年次報告書に発表された論考の縮小版が発表された。ただ、以前の論考では、「本田」と対比された「畠田」が同時に「棚田」とも対比され、3者が水田類型として論じられていたのに対して、今回「棚田」との対比がなく、ため池に依存した乾田としての「畠田」が近畿地方以西に広く分布する一般性をもつことが十分論じられなかっ

た。また、「里山」という里と山とが平和的に共生するという見方は、里が山と対抗的に関係するフロント・ラインが消滅して、里と街との新たなフロント・ラインが登場することで成立する「街」の視点ではないか、との見解も削除されている。代わりに、稲作農業が開拓によって貧困化を必然的に招くとする一種の本質論が語られている点には、疑問が投げられた。瀬田丘陵地域の自然条件・経済条件は、他地域と比較してむしろはるかに恵まれている、ということが指摘された。

(2) 牛尾洋也「里山の所有と管理に関する一考察」

一面的な視点に傾斜しがちの従来までの林野研究・入会研究に対して、「里山」の観点を導入することで新たな総合の必要性が指摘され、とりわけ民有地の多い西日本において、村が実際に山を使っていたあり方を検討し、「奥山」と対比されるのではない「里山」の見方の可能性を具体的に論じる試みがなされた。具体的には、土地台帳調査等によって瀬田山での「明治初期官山払下」とその後の経緯を検討し、「公益目的を維持する限りで私的利用が認められる村と山林との関係」を「里山の新たな理論構築」として提起することが示唆された。大変興味深い成果がまとまりつつあることを感じさせた。

(3) 三阪佳弘

上田上および瀬田地区（南大萱、大江など）の土地台帳調査の結果を、所有者および面積によって一覧表にしたものを示し、特に山割地・入会地の特定の可能性について指摘がなされると同時に、近世から近代への割山の連続性が強調された。「山割」の理解については、牛尾氏と見解が一致せず、瀬田山での慣行については、なお明瞭ではない点が多々ありそうである。

〔30日9：00～12：00、14：00～17：00〕

(4) 高桑 進

2時間余りにわたって「京女の森」とその活動、環境教育学会についての批判的な話題、割り箸による環境教育の可能性についの話しが展開された。割り箸についての議論は、論点が必ずしも明瞭ではなかった。

(5) 鈴木龍也「英国の『コモンの権利』と日本の入会権」

英国のコモンズの歴史的経緯とそのあり方を日本の入会慣行とどこまで類比的に論じうるかが議論の焦点となった。

(6) 田中 滋「里山の危機とグローバリゼーション」

里山の危機を林業の危機との関係で見ることの重要性が強調され、特にグローバリゼーションと並行関係にあるナショナリゼーションの一つとして「拡大造林」政策の意味が検討される必要性が指摘された。ただ、「拡大造林」の概念が実際の政策からずれていささか拡大されている、との批判がなされた。